三重大学教育学部研究紀要　第 70 巻　教育科学（2019）263－268 頁

子どもの成育と健康度に関する研究 V

須永　　進・青木　知史*・堀田　典生**

A Study on Growth and Health of Children V

Susumu SUNAGA, Satoshi AOKI, Norio HOTTA

要　　旨

子どもの成育と健康度について、基本的生活習慣、運動・遊び、社会性に関する調査を実施した結果、54 年、69 年の他の調査に比べ、発達面で一部後退性を示す項目がみられると同時に、幼稚園や保育所など保育環境や男女差により、達成率や獲得率に違いが認められた。また、これらには相互に関連性があり、幼児期の子どもの成育と健康に影響のあることが改めて認識される結果となっている。

キーワード：子どもの成育、子どもの健康度、社会性の発達、子どもの運動と遊び

1. はじめに

今日、物質的に豊かな環境にあるといわれている日本の子どもたちの成育状況に目を向けると、問題がないとはいえない。特に、成長･発達の著しい幼児期の子どもでは、基本的生活習慣や身体発育上および精神上の様々な問題が指摘されている。子どもの成育は、こころとからだのバランスが重要であることから、本研究では今日の子どものこころとからだの成育状況と、それを規定する生活環境について調査を行い、今日の子どもの健康度を検討することを目的としている。

2. 研究方法

調査に協力が得られた幼稚園および保育所に在籍する 5、6 歳児の保護者を対象として、質問紙による調査を行った。幼稚園は北海道、埼玉、大阪、静岡、三重に所在する 5 園の保護者 263 名、保育所は北海道、東京、静岡、岐阜、大阪の 5 園の保護者 230 名から回答を得ている。

具体的には、基本的な生活習慣及び発達状況、運動及び遊びの状況、社会性の発達に関する内容についてアンケート調査を行い、それぞれの項目のデータと、そのデータを相互にクロス集計し、両者の相関関係の有無について考察する方法をとった。

なお、本研究については大阪成蹊短期大学の研究に関する倫理審査を経ている（2012 年）。

3. 結果と考察

1）子どもの社会性の発達について

幼児期の子どもの社会性を含む精神発達に関する先行調査である「日本の幼児の精神発達」（『保育学講座 9』日本保育学会、1970 年）では、1954 年と 1969 年の 15 年間の経過による子どもの発達の変容が調査報告されている。

この調査によると、多くの項目でその低下が認められているが、本研究では、この調査項目のうち 17 項目を参考に 2012 年に 5、6 歳児の保護者を対象にアンケート調査を実施し、その後の発達の変容状況の調査・分析を行ったものである。

結果としては、先の調査に比べ、ほとんどの項目で高い肯定率が示された。

まず、各項目の認定値を、施設および男女別に集計した平均値を算出し、施設（幼稚園、保育所別）×性別の 2 要因分散分析を用い、次のような結果が得られた。

幼稚園、保育所の施設間に関する主効果の違いでは、「競争心がある」（保＞幼）、「ほかの子どもにめいわくをかけたらあやまる」（幼＞保）、「男の子・女の子だけで遊ぶ」（幼＞保）、「自分の思いどおりにならなければいうことをきかない」（保＞幼）の各項目でそれが認められた。しかし、先述の調査に比べ、両施設間による違いは次第に小さくなる傾向がみられる。

*大阪成蹊大学教育学部
**中部大学生命健康科学部

次に、男児・女児の性別間に関しては、「悲しんでいる子をなぐさめる」（女児＞男児）、自分を「わたし、ぼく、自分という」（男児＞女児）、「ほかの子どもを援助したり、守ってやったりする」（女児＞男児）、「自分のことを名前でよぶ」（女児＞男児）と、自分の呼び名および思いやり行動など、社会性に関して両者間に性差が認められた。

こうした結果のうち、特に、自分のことを「ぼく」「わたし」ではなく、自分の名前で呼ぶ率は、先の調査に比べ、大幅に増えていることや、男の子、女の子という同性同士で遊ぶ割合は、やや低いことが今回の調査で明らかになった。

以上のように、男児・女児による差や幼稚園－保育所という施設間による差が子どもの社会性という精神発達面に影響している点が考えられるが、その差は過去の調査に比較すると、縮小する傾向が認められた。また、こうした結果の背景については、保護者の養育姿勢や幼稚園、保育所および保育者自身の保育方針や方法、内容になど、子どもを取り巻く生活環境、養育に関する人的、物的環境といったさまざまな要因が反映されていることを考慮し、今後さらに、この点に関して総合的に検討する必要がある。

2）運動と遊び－保育環境・形態について

先述した子どもの社会性の発達に次いで、ここでは運動と遊びに関する項目から、子どもの成育と健康度について検討した。

方法としては、子どもの保育環境としての幼稚園および保育所の子どもとの比較を「子どもアクティビティ尺度」（鈴木ほか、2005 年）を用いている。

この尺度は、「座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い（プレイ）、「遊びのなかで友達をリードすることが多い」（リーダー）、「いろいろな運動・あそびに進んで取り組む」（チャレンジ）、「友達に関わっていっしょに遊ぶ」（ソーシャル）など、運動と遊びに関する因子－15 項目の質問から構成されている。また、各項目を第 1 因子「プレイ」、第 2 因子「リーダー」、第 3 因子「チャレンジ」、第 4 因子「ソーシャル」の 4 つの因子で分類している。そして、各項目ごとに「1 点：全くあてはまらない」、「2 点：あてはまらない」、「3 点：どちらとでもない」、「4 点：あてはまる」、「5 点：とてもあてはまらない」の 5 件法で回答を求めている。

主な結果として、男児の「チャレンジ因子」以外では、幼稚園と保育所の子どもに差はみられなかった。

また、(1) いろいろな運動遊びに進んで取組み、課題を克服する遊びに意欲的に挑戦し、ルールある集団遊びや競い合う遊びに積極的参加することを評価する「チャレンジ因子」では、幼稚園の子どもより保育所の子どものほうが有意に高い値を示した。

次いで、(2) 男児をもつ保護者の子ども数は、幼稚園より保育所の方が多い傾向にある。

(3) 男児を持つ保護者の年齢層、家族形態、仕事形態居住地域の分布の仕方が、幼稚園と保育所では有意に異なった。

また、(4)「チャレンジ因子」と保護者の子どもの数との間において、幼稚園で有意な相関関係は認められなかったが、保育所においては相関関係の傾向が認められた。

以上の過程より、特に注目すべき点として 4 つの因子のうち、遊びに活動性、積極性、意欲性を示す「チャレンジ因子」では、男児において幼稚園の子どもより、保育所の子どもにそういった値が高いという結果が明らかになっている。

この他、調査対象になった幼稚園、保育所の所在地は多方面にわたっていることからその地域性との関係でみると、比較的人口密度の高い地域にある 2 園と人口密度の低い地域にある 3 園に対して、地域、性別、因子の 3 要因分散分析を行ったが、有意な相互の関連性は認められなかった。そのことから、今回の調査対象の幼稚園と保育所に関して、子どもの運動・遊びの状況において、地域性という点での影響は大きくないものと考えられた。

3）子どもの基本的生活習慣と精神的発達について

次に、生活環境の変化や保護者の養育能力、価値観の変容が原因に、子どもの基本的生活習慣の低下がみられるようになり、心身の成育に何らかの影響が心配されている。今回は関連する先述の「日本の幼児の精神発達」と比較することにより、現状を明らかにする。

まず、アンケートでは、「手洗いの習慣」、「決まった時間のおやつ」、「一人でトイレができる」といった子どもの基本的生活習慣の獲得状況を中心に、「家の中で遊ぶ」、「一人で遊ぶことが多い」といった遊びの様態の他、「人を思う気持ち（思いやり）」の有無など精神面の発達状況に関連する質問項目について回答を求めている。

それによると、今回調査対象になった 5 歳から 6 歳の幼児期の子どものほとんどができる（80%以上）項目としては、一人でトイレができる（94.3%）や服の着脱（89.7%）、手洗いの習慣（85.6%）がそれに該当することが明らかになった。

反対に、習慣の獲得率が低い項目としては食事に関してで、「好き嫌いなく食べる」割合は、全体の半分以下の 45.6%であった。また、遊びに関しては、主に家のなかで遊ぶ子どもが 3 人にひとりの割合で、また、半数近くが年齢の同じ子と遊んでいる。さらに、5 人にひとりがテレビを観たり、ゲームをするなど、あまり

体を動かして遊ぶことが少ないという結果がでている。この他、遊びや活動のあとの後片づけが習慣的にできる子どもの割合は4割弱（37.7%）と、低率であることが、今回の調査で判明している。

また、今回の調査結果の一部を、同様の内容を調査した別の調査（日本小児保健協会「平成 12 年度幼児健康度調査報告書」2000 年）と比較すると、手洗いや歯磨きの習慣、決まった時間におやつを食べるという項目が「できる」子どもの割合が大きく後退していることがわかる。また、精神面の発達のひとつとされる「人への思いやり」という項目は、12 年前に比べ、15%近い減少がみられるなど、10 数年間の経過のなかで、子どもの心身の成長・発達の面にいくつかの変容（特に、精神面での後退現象）のあることが明らかになっている。

この他、子どもの成育に関係するといわれるテレビの視聴に関して、多くの子どもが「テレビを消すようにいわれるとそれに従う」（83.4%）など、保護者の教育やしつけの影響がみられる反面、その時間に近年顕在化している電子機器によるゲームやスマホの普及が、子どもの遊びに何らかの影響（身体を動かしたり、戸外での遊びなど）を及ぼすのではないか、といった新たな遊び環境への変容要因の出現、普及の現状を分析・検討する必要性が感じられる結果であったといえる。

4）基本的生活と精神的発達との相互関係について

先述した 3）の結果をふまえ、基本的生活習慣の獲得と精神面との相互関係について、両者の項目をクロス集計し、分析した結果が以下のとおりである。

まず、子どもの基本的生活習慣のうち、起床、就寝、歯磨き、手洗い、トイレの習慣が身についている子どもの群を A 群とし、そうでない群を B 群として、今回の調査で規定した 17 の社会性の項目とクロス集計した。

その結果、5 つの基本的生活習慣が身についている A 群の子どもたちは、十分身についていない B 群の子どもたちに比べ、社会性の発達面で上回っていることが明らかになった。17 の社会性の内容のうち、ここでは、7 つを取りあげた。

それによると、「責任をもってする」、「めいわくをかけたらあやまる」、「ほかの子どもを援助したり守ったりする」など、子どもの社会性の発達を示す行動面において、基本的生活習慣が身についている A 群の子どもたちは、そうでない B 群の子どもたちより、その割合が高いことが認識された。また、5、6 歳の子どもでは周囲とのかかわりを考えて、自己の要求を抑え、友達の意見を聞いて遊ぶことができる社会性の発達がみられるが、B 群の子どもたちは「自分の思いどおりにならないということをきかない」割合が A 群の子どもたちより高いことが明らかになっている。すなわち、今回の調査結果の分析によると、自立に必要な基本的生活習慣が身についていない子どもの多くに、社会性の発達面に遅れがみられるということである。

以上の結果から、子どもの社会性の発達と基本的生活習慣の獲得との間には、高い関連性のあることが、改めて確認された。このことから、特に、5、6 歳という幼児期にある子どもにとって、豊かな成育と健康を保障する上から、幼児教育や保育、子育ての中心的な目標として、子どもの年齢や発達段階に沿った基本的生活習慣の獲得を図ることが、子どもの社会性の発達を促すことにつながるという認識をもつことが　保護者および保育者に不可欠であると思われる。

5）運動・遊びの状況と社会性の発達との関係

さらに、本研究では子どもの運動・遊びの調査結果と社会性の発達との関係について、相互にクロス集計し、分析を試みている。さらに、算出にあたっては子どもアクティビティ尺度の 4 因子項目と、社会性の発達に関する各質問項目それぞれの間について、ピアソンの積率相関係数を算出した。

r=0.3 以上の相関が認められた項目間について、以下考察を行う。①「5.競争心がある」は「チャレンジ」だけでなく、「リーダー」との相関も高かった。この年代において、競争心は仲間内でのリーダー的な行動と結びついているといえる。②「6.悲しんでいる子をなぐさめる」と「ソーシャル」の相関は、仲間との遊び活動と向社会的行動との関連を示唆すると考えられる。③「9.よその子を誘って新しい遊びをはじめる」は、「リーダー」・「チャレンジ」・「ソーシャル」各因子項目との相関が高かった。アクティビティの様々な側面と関連する項目のようである。④「11.ほかの子の誤りや、まちがいを指摘する」と「リーダー」との相関は、遊びを率先して行う「リーダー」的な側面と、このような言動の積極性との関連を示すものである。⑤「15.まかされたことを責任もってする」は「チャレンジ」との相関が認められた。幼児が積極的に遊びに関わろうとする意欲は、責任感と関連していることを示唆する結果である。

一方、「プレイ」因子項目は、いずれの社会性項目とも 0.3 未満の相関にとどまった。この因子は他者との関わりとは直接の関係はなく、遊びに対する活動性に関わる側面であるため、妥当な結果と考えられる。

また、相関係数を男女別に算出した。上記 0.3 以上の相関が認められた項目間の中で、男女差が大きかったのは、②「6.悲しんでいる子をなぐさめる」と「ソーシャル」、③「9.よその子を誘って新しい遊びをはじめる」と「チャレンジ」・「ソーシャル」の間であった。社会性と 運動・遊びの関連は、男女により様相がやや異なっ

ていると考えられる。

以上の結果より、アクティビティ尺度の各因子が、社会性の様々な側面と関連しており、幼児の遊び・運動面での活動と社会性との関係について、多様な示唆が得られた。

4. 本研究の総括的まとめ

以上のように、本研究では幼児期の子どものうち、5、6 歳児を持つ保護者を対象に、アンケートによる調査を実施し、その成育と健康度の現状について分析・検討を行った。その過程において過去の状況を知るために、同様の調査結果に注目し、比較する方法でアプローチを試みた。

その結果、幼児期の子どもの社会性を含めた精神的発達に関する各項目の実情が明らかになるとともに、54 年および 69 年時点と比べ、基本的生活習慣の獲得や精神面での発達の一部に後退現象がみられる項目のあることが認められ、子どもの成育と健康度という視点からみると、問題がないとはいえない現状が明らかになっている。

また、子どもの生活環境としての保育施設（保育所、幼稚園）による違いや男女による性差などで、基本的生活習慣や社会性に違いがみられることが改めて確認される結果が得られた。

次いで、運動・遊びの面に関しては、その判断の尺度を用いてみると、4 つの因子のうち、いろいろな運動遊びに取り組み、遊び課題を克服する遊びに意欲的に挑戦し、ルールある集団遊びと競い合う遊びに積極的に参加することを評価する「チャレンジ」を示す因子に、例えば幼稚園および保育所の子ども間に差がみられた。すなわち、この項目では幼稚園児より保育園児のほうがその傾向が高いといった結果が出ている。

また、調査対象になった幼稚園、保育所の地域性に関しては、有意な結果は検出されなかったことから、今回の調査に関しては、地域の違いによる影響は少ないものと考えられる。

子どもの成育と健康度を推し量る基準ともいえる基本的生活習慣の獲得の有無と精神面の発達に関しては、自立に関するトイレや服の着脱、手洗いの習慣は 8 割以上と、高い獲得率（習慣づけ）になっているが、反対に食事や遊び、後片づけなどの項目が低い割合になっていることが判明している。前者は、保育所や幼稚園という集団生活で指導され獲得されるため、と考えられる。

以上の結果をふまえると、成育の著しい 5、6 歳の幼児期の子どもの基本的生活習慣、運動・遊び、社会性の間には相互関係のあることが、改めて認識された。

また、その子どもの調和のとれた成育と健康は、心身の発達や基本的生活習慣が複合的に関連し合い育まれることから、家庭と連携を取りながら幼稚園や保育所などの集団保育の果たす機能は大きい。同時に、それを担う保育者の役割も重要であり、保育者自身の子どもの成育と健康度に関する認識を深化させるように努める必要がある。

本稿を終えるにあたって、本研究が家庭や保育環境など、生活環境の変容のなかで、幼児期の子どもの心身の豊かな成育と健康が保障されるために必要とされる要件を検討するための基礎的資料になることを願っている。

また、本稿は一連の共同研究である「子どもの成育と健康度に関する研究」の総括的性格のもので、詳しいデータや分析等については、下記の各論文を参照されたい。

最後に、本研究にご協力いただいた、幼稚園および保育所と、その保護者の方々に謝意を表します。

参考文献

1. 青木知史、須永　進、堀田典生「子どもの成育と健康度に関する研究Ⅰ－社会性の発達を中心に－」『研究紀要』第 11 巻　通巻第 51 号　大阪成蹊短期大学　2014.
2. 堀田典生、須永　進、青木知史「子どもの成育と健康度に関する研究Ⅱ－幼児の身体活動性を規定する因子の幼稚園児と保育園児の違い－」『生命健康科学研究所紀要』Vol.12 中部大学　2015
3. 須永　進、青木知史、堀田典生「子どもの成育と健康度に関する研究Ⅲ－基本的生活習慣の獲得－」『三重大学教育学部研究紀要』第 67 巻　三重大学　2016
4. 須永　進、青木知史、堀田典生「子どもの成育と健康度に関する研究Ⅳ－基本的生活習慣と社会性の関係－」三重大学教育学部研究紀要』第 68 巻　三重大学　2017

同時に、本研究は日本保育学会研究大会（2013 年から 2017 年）において、継続的に研究発表している。それは、以下のとおりである。

・「子どもの成育と健康度に関する研究 I－社会性の発達を中心に－」第 66 回大会　2013．5
・「子どもの成育と健康度に関する研究 II－幼児の身体活動性を規定する因子の幼稚園児と保育園児の違い－」第 67 回大会　2014．5
・「子どもの成育と健康度に関する研究 III」第 68 回大会 2,015．5
・「子どもの成育と健康度に関する研究 IV」第 69 回大会 2,016．5
・「子どもの成育と健康度に関する研究 V－運動・遊びの状況と社会性の発達との関係」第 70 回大会　2017．5

アンケート調査へのご協力のお願い

このアンケートは、子どものこころとからだの生育状況と、それを規定する生活環境について調査し、その分析結果から子どもの健康度を調査することを目的としています。この点を十分ご理解いただき、ご協力をお願い申し上げます。

どの質問に関しましても、正しい答えがあるものではありません。感じたままに率直にご回答ください。また、回答いただきましたアンケートは研究目的以外には使用しませんし、データは統計的に処理され、個人が特定されないよう配慮致しますので安心してお答えください。

この調査への参加、各質問への回答は任意です。回答しなくても一切の不利益はありませんので、お答えしにくい質問がありましたら無理に回答しないでください。また、一旦参加を承諾した後、自由に撤回することができます。

2012年9月

「子どもの成育と健康度に関する研究」

三重大学教育学部　教授　須永　進
大阪成蹊短期大学児童教育学科　教授　青木知史
中部大学生命健康科学部　講師　堀田典生

※今回のアンケートは、5,6歳児のお子さんが対象で、その保護者の方々にお子さんの様子をおうかがいしております。きょうだいのいる方は、その点をご確認の上、回答をお願いいたします（もし、5,6歳のお子さんが複数いらっしゃる場合は、年齢が上のお子さんについてご回答ください）。

1. お子さんの性別
性別：①男の子　②女の子（右端の□に番号をご記入ください）……□

2. お子さんは何人いますか。人数を右端の□にご記入ください。……□人

3. あなた自身の年齢について、該当する項目をひとつ選び右端の□に番号をご記入ください。……□
① 19歳以下　② 20～24歳　③ 25～29歳　④ 30～34歳
⑤ 35～39歳　⑥ 40～44歳　⑦ 45歳以上

4. 現在同居している家族形態について、該当する項目をひとつ選び右端の□に番号をご記入ください。……□
①夫婦と子どもの核家族
②父親または母親によるひとり親と子どもの核家族
③祖父母（またはどちらかひとり）を含む三世代家族（祖父母・夫婦・子ども）
④きょうだい・親戚を含む多数家族
⑤現在は夫または妻の単身赴任により一時的にひとり親と子ども
⑥その他

5. 現在のあなたのお仕事の形態について、該当する項目をひとつ選び右端の□に番号をご記入ください。……□
①常勤（フルタイム）　②パート・アルバイト　③自営　④休職中
⑤求職活動中　⑥無職　⑦その他（　　）

6. あなたとお子さんとの関係について、該当する項目をひとつ選び右端の□に番号をご記入ください。
①母　②父　③その他(続柄　　)……□

7. あなたのお子さんの生活習慣や日常の様子などについてお尋ねします。1)～27)のそれぞれについて、あてはまる項目をそれぞれひとつ選び、○印をご記入ください。また、28)～34)については、該当する項目の番号または数値を右端の□にご記入ください。

		とてもあてはまる	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	全くあてはまらない
1)	起床のとき、ひとりで起きることができる					
2)	起床のとき、ひとりで着替えることができる					
3)	起床や就寝のとき、「おはよう」「おやすみ」と自分から言える					
4)	決められた時間に寝ることができる					
5)	ひとりでパジャマや寝間着に着替えて寝る					
7)	家庭で食事やおやつは決まった時間に食べている					
8)	食事は、好き嫌いなく食べられる					
9)	食事は、家族それぞれの時間に食べることが多い					
10)	どちらかと言うと、手作りよりはコンビニやスーパーマーケットの惣菜が多い。					
11)	こぼしたり、汚すことなく、ひとりで食べられる。					
12)	食事の準備や後片付けができる。					
13)	歯磨きはひとりでできる					
14)	手洗いの習慣がある					
15)	遊びは、主に家の中が多い。					
16)	隣・近所の友達と遊ぶより、ひとりで遊ぶことが多い。					
17)	ふだんの遊びは、テレビを観たり、ゲームなど体をあまり動かさない遊びが多い。					
18)	遊ぶ友達は年齢が同じ子どもが多い。					
19)	遊びを通して友達関係を積極的に持とうとしている。					
20)	トイレはひとりでできる					
21)	家で、興味のある本や絵本を自分から読んだり、読んでほしいという					
22)	遊びや活動のあとの後片づけが習慣的にできる					
23)	日常生活で使われる文字や数字、記号などに興味・関心がある					
24)	日常生活で使われる文字や数字、記号などがわからないときに、自分から聞いてくる					
25)	日常の生活の出来事や興味・関心のあることを進んで話す					
26)	遊びや言動のなかに友達や周囲の人（家族や先生など）への思いやりがみられる					
27)	保育園や幼稚園の集団生活を喜んだり、楽しんだりしている					

28)いつも遊ぶ友達の平均的人数をお答えください。……□
① 1人から2人　② 3人から4人　③ 4人以上

29)テレビは 1 日にどれくらい観ますか。 …… □

① 30 分以内　② 30 分から 1 時間　③ 1 時間から 2 時間
④ 2 時間から 3 時間　⑤ 3 時間から 4 時間　⑥ 4 時間以上　⑦観ない

31)テレビを観る場合、主に誰と観ますか。 …… □

①ひとりで　②きょうだいで　③家族と　④テレビは観ない

32)テレビを消すように言うと、それに従いますか。 …… □

①はい　②いいえ　③テレビは観ない

33)パソコンをゲームや学習に使っていますか。 …… □

①はい　②いいえ

34)お子さんがパソコンを使う時間は、1 日に何時間くらいですか。 …… □ 時間

8. あなたのお子さんの普段の遊びの様子についてお尋ねします。1)～ 15)のそれぞれについて、あてはまる項目をそれぞれひとつ選び、○印をご記入ください。

		とてもあてはまる	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	全くあてはまらない
1)	座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い					
2)	汗をたくさんかいて遊ぶ					
3)	身体を思いっきりよく大胆に動かして遊ぶ					
4)	身体を活発に動かして遊ぶことを好む					
5)	遊具から遊具へ移動して遊ぶ					
6)	洋服などが汚れるのを気にしないで遊ぶ					
7)	あそびのなかで友達をリードすることが多い					
8)	あそびのなかでいろいろな決断をまかされている					
9)	あそびの中で自分の考えやアイディアを試したり提案したりする					
10)	いろいろな運動あそびに進んで取り組む					
11)	課題を克服するあそび(竹馬、のぼり棒、なわとび、うんてい、マット、鉄棒など)に意欲的に挑戦する					
12)	ルールのある集団遊びや競いあうあそび(ドッジボール、サッカー、鬼ごっこ、缶けり、リレー等)に積極的に参加する					
13)	友達に関わっていっしょに遊ぶ					
14)	自分からあそびに加わっていける					
15)	周囲の子をよく見ていて真似して遊ぶ					

9. あなたのお子さんの対人面での様子などについてお尋ねします。次の 1)～ 17)の質問について、あてはまる項目をそれぞれひとつ選び、○印をご記入ください。

		する	ときどきする	ほとんどしない	まったくしない
1)	自分のしたことをおとなにみてもらいたがる				
2)	ほかの子どもに玩具をもってきてやる				
3)	おとなの手伝いを素直にうける				
4)	自分の番になるまで待つことができる				
5)	（よその子どもとの間に）競争心がある				
6)	悲しんでいる子どもをなぐさめる				
7)	「わたし」とか「ぼく」とか「自分」とかいう言葉で自分をよぶ				
8)	ほかの子どもを援助したり守ってやったりする				
9)	よその子どもたちを誘って新しい遊びをはじめる				
10)	よそのおとなにすすんで話しかける				
11)	ほかの子どもの誤りや、まちがいを指摘する				
12)	ほかの子どもにめいわくをかけたらあやまる				
13)	男の子だけと遊ぶ(男の子の場合)、女の子とだけ遊ぶ（女の子の場合）				
14)	ほかの子どものことをほめて話す				
15)	まかされたことを責任をもってする				
16)	自分のことを自分の名前でいう				
17)	自分の思いどおりにならなければいうことをきかない				

本調査についてのお問い合わせ等は、下記までお願いいたします。

三重大学　教育学部学校教育教員養成課程 幼児教育コース　教授　須永　進
〒 514-8507　三重県津市栗真町屋町 1577
TEL：059-231-9338　E-Mail：sssunaga@edu.mie-u.ac.jp

大阪成蹊短期大学　児童教育学科初等教育専攻　教授　青木知史
〒 533-0067　大阪市東淀川区相川 3-10-62
TEL：06-6829-2543　E-Mail：aoki-s@osaka-seikei.ac.jp

中部大学　生命健康科学部スポーツ健康医療学科　講師　堀田典生
〒 487-8501　愛知県春日井市松本町 1200
TEL：0568-51-9667　E-Mail：horinori@isc.chubu.ac.jp